

チロシンキナーゼ阻害剤を用いた外来がん化学療法における治療継続状況

津村 直孝¹⁾、田村 真哉²⁾、正野 隆³⁾、松野 紀世彦⁴⁾、永野 悠馬⁵⁾、前田 守⁵⁾、
長谷川 佳孝⁵⁾、月岡 良太⁵⁾、森澤 あずさ⁵⁾、大石 美也⁵⁾

- 1)(株)アイン信州 茅野土屋薬局
- 2)(株)アイン信州 飯山土屋薬局
- 3)(株)アイン信州 若里土屋薬局
- 4)(株)アイン信州
- 5)(株)アインホールディングス

【目的】 がん細胞の増殖に関わるタンパク質等を標的とした抗がん剤である分子標的薬は、種々のがん種で使用されている一方、従来の抗がん剤とは異なる有害事象が生じることが知られている。そこで本研究では、分子標的薬の代表例としてEGFRチロシンキナーゼ阻害剤(以下、EGFR-TKI)に着目し、これを用いた外来がん化学療法の継続状況を調査し、薬局薬剤師が果たすべき役割について検討した。

【方法】 2017年4月から2020年10月に当社グループが運営する保険薬局598店舗が応需した処方箋47,309,052枚を対象に、抗がん剤および分子標的薬の処方状況を調査した。また、EGFR-TKIの例としてオシメルチニブ、ゲフィチニブ、アファチニブの服用継続日数をカプランマイヤー法で解析を行った(アイングループ医療研究倫理審査委員会承認番号:AHD-0094)。

【結果】 全処方箋における抗がん剤を含む処方箋の割合(以下、抗がん剤応需率とする)、および抗がん剤を含む処方箋における分子標的薬を含む処方箋の割合(以下、分子標的薬応需率とする)は、2017年4月はそれぞれ1.21%と11.7%、2020年10月はそれぞれ1.38%と14.1%であった。また、服用期間の中央値、および95%CIは、オシメルチニブ(n=730):398日[373-444]、ゲフィチニブ(n=338):266日[232-308]、アファチニブ(n=290):292日[248-364]であった。

【考察】 調査期間において、抗がん剤の応需率およびEGFR-TKIの応需率は増加しており、薬局薬剤師がEGFR-TKI処方へ対面する頻度の増加が示された。また、今回調査したEGFR-TKIの服用期間中央値は、最短でも約9カ月であったことから、薬局薬剤師はEGFR-TKIを服用する患者については長期的な治療となることを前提として、服薬状況や体調変化を詳細に確認し、服薬アドヒアランスの維持や患者QOLの向上にむけて高度薬学管理を発揮することが必要であると考えられる。

(第31回医療薬学会年会(2021年10月, Web)にて発表, 一部要約)